

古仏語の名詞所有限定に関する一考察

前 田 弘 隆

はじめに

古仏語では、限定補語を利用する名詞の所有限定表現に三様の句構成が併存していた。これらの句構成は、限定補語の導入の仕方に特徴が見られる。

- | | | |
|-----|---------|-----------|
| (a) | le fils | Carlun |
| (b) | le fils | à Carlun |
| (c) | le fils | de Carlun |

左欄(a)は、最も特徴的な、格の独立用法に依存した構成。(b)は、前置詞 'à' を介し、(c)は、同 'de' を介する構成である。以後、(a)型を「並置構成」、(b)型を「À 構成」、(c)型を「DE 構成」と呼ぶ。

この三構成の併存¹⁾は、規範性の高い文法が確立する以前の気儘に任せた結果というのではなく、現代語では形式上問題とされなくなった文法現象がそこに存在していた為と考えられる。それ故、三構成の用法には『奇妙な限定』²⁾が指摘され、『洗練された文法化の美事な手本』³⁾が見出されるのである。

この用法上の限定は、L. Foulet の「Petite syntaxe de l'ancien français」(1977) に詳細な解説を見ることができる。しかし、テキストを読んでいると、そこに指摘された限定条件から逸脱する例にぶつかることが少なくない。殊に、並置構成に関する記述が確かであるのに較べ、À・DE 構成についての例外がかなり観察される。また、他の研究者が指摘する条件との食い違いも、この両構成を巡るものである。

そこで、フレが挙げる三構成の出現条件を踏まえながら、以下に記す古仏語テキストから採集された構成の用例を分析し、その出現状況を明らかにしてみる。次いで、条件から逸脱すると判断される例について、新たに構成利用上の特徴を検討することとする。

〔使用テキスト〕

- | | |
|---|------------|
| (1) La Vie de saint Alexis, Oxford, Blackwell, 1968 | (11世紀, 韻文) |
| (2) La Chanson de Roland, La Geste Francor, 1940 | (12世紀, 韻文) |
| (3) La Couronnement de Louis, CFMA, Champion, 1978 | (同 上) |
| (4) Gui de Warewic, CFMA, Champion, 1933 | (13世紀, 韻文) |
| (5) La Mort le roi Artu, TLF, Droz, 1964 | (13世紀, 散文) |
- (※, (4) Gui de Warewic は1～5192行迄を対象)

I. 三構成の出現条件

解説の詳細さを考慮して、まずフレの指摘を出現条件として構成毎に要約する。

[1] 並置構成＝限定補語が、(i)単数であり、次の各特徴を有する時、(ii)固有名詞、(iii)定冠詞、所有形容詞の限定を受け特定化された人物に言及する『親族或いは姻戚関係を表わす』¹⁾名詞、又は、『現世、来世の高位高官を表わす』¹⁵⁾名詞。

[2] À 構成＝限定補語が、(i)複数である時、(ii)[1]—(iii)の名詞が上記の限定を受けず特定化されていない時⁶⁾、(iii)[1]—(iii)に挙げられた以外の名詞である時。⁷⁾

[3] DE 構成＝限定補語が、並置構成に位置する時には主語的価値を有するのに反し、(i)主語的価値を持たぬ時⁸⁾、(ii)具体的人物を表わさず、『人々の類全体』を表わす時。⁹⁾

ここで注目されるのは、第一に、各構成の出現に關与するものとして、全て限定補語に位置する名詞の特徴が指摘されていること。従って、出現構成の選択が、この補語名詞の特徴に基づいて決定されると見做されていることである。第二に、並置構成と À 構成との密接な関連性が示唆されていること。つまり、補語名詞の特徴が、(i)単数から複수에、(ii)特定化された状態からそうでない状態に、(iii)名詞の意味が‘marqué’されたものから‘non marqué’に変化すると、自動的に出現構成が並置から À へと移動すると理解されていることである。一方、DE 構成は、[3]—(i)の特徴を巡って並置構成と関係づけられているに過ぎない。[3]—(ii)の特徴に至っては、もはや他二構成との関連は乏しいものである。¹⁰⁾

従来の研究を紹介する意味で、さらに他の文法家に依る使い分けの指摘にも簡単に触れる。これらも凡そ、既に見たと同じ観点から為されている。つまり、各構成の特徴として補語名詞が取り挙げられているのである。

並置構成は、上記[1]—(i)(ii)(iii)のいずれかが、ここでも基本的条件として考慮されている。この指摘の一致は、二格対立を形態・統辞論の根本に据える古仏語にあって、被制格の拡大用法として実現するこの構成が関心を集め易かったものと思われる。

しかし、À・DE 構成については、次の点で指摘が分かれている。

(イ)限定補語が複数ならば DE 構成が用いられるとするもの — Nyrop(1925), Galliot(1967), Raynaud de Lage(1975)。

(ロ)DE 構成の限定補語に主語的価値も認めるもの — Nyrop(idem), Ménard(1976), Moignet(1976), Palm(1977)。

(ハ)l'anme del cunte のような例に DE 構成の先駆け的用法を示唆するもの — Nyrop(idem), Bourciez, (1968)。

これらの指摘のズレは、À 構成と DE 構成との間の用法の揺れや DE 構成のより広い使用域の存在を予想させる。事実、この構成を巡る表現例に、上記の条件から逸脱すると判断されるものが多い。

(1) Ço est li granz dulors por la mort de Rollant. (Roland,1437)

(それは、ロランの死を悼む大なる悲嘆也！)

(2), car la noise estoit si grant de l'abateiz des chevaliers (Artu,188)

(というのは騎士達の戦いの音がとても大きかったので)

例(1)は、前記〔1〕-(ii)及び〔3〕-(i)の条件に、例(2)は、〔2〕-(i)の条件にそれぞれ抵触しているからである。

しかし、この様な表現例が逸脱したものではなく確かな条件の許で現われるものであることを明らかにする為に、先述の古仏語テキストから採られた用例に見られる各構成の現われ方を次に明らかにする。

Ⅱ. 三構成の出現状況

ここでは、限定補語に〔+ humain〕名詞が位置する三構成の用例を、さらに補語名詞の特徴から分類し直す。そして、従来の条件に合致する例、逸脱する例の出現状況を例数の分布に依って明らかにする。その際、構成決定に関与すると指摘されてきた補語名詞の特徴の中から、構成の交替を誘導すると捉え易い次のものを分類規準に据える。

特徴1 = 〔+単数, +特定化, + nom marqué〕(cf, 〔1〕-(i)(ii)(iii))

特徴2 = 〔-単数, -特定化, - nom marqué〕(cf, 〔2〕-(i)(ii)(iii))

特徴3 = 〔virtuel〕⁽¹¹⁾

採集例数は、652例であった。その構成毎の内訳は、並置-409例、À-86例、DE-157例である。これらをさらに上記の特徴に基づいて分類すると、次表の例数分布が得られた。

並置	À	DE	限定補語
〔J-1〕 406	〔A-1〕 48	〔D-1〕 79	特徴1
〔J-2〕 3	〔A-2〕 38	〔D-2〕 47	特徴2
〔J-3〕	〔A-3〕 0	〔D-3〕 31	特徴3

左表〔J-1〕(406)、〔A-2〕(38)、

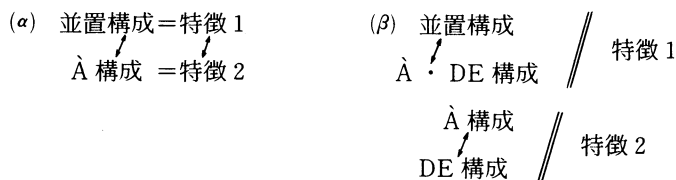
〔D-3〕(31)は、補語名詞の特徴と出現構成との対応が、フレの条件記述から説明できる用例数である。そこで、並置構成に焦点を当てその限定補語を分析すれば、409例中406例について⁽¹²⁾、

特徴1を示す名詞が指摘できるので、この構成は、限定補語が単数であり特定化された人物を示す‘marqué’名詞である時に出現するという従来の条件づけの正確さが確認できることになる。しかし、補語名詞の特徴が特徴1ならば並置構成を成すということにならないのは、同一特徴の名詞を限定補語に位置づけながらÀ・DE構成を成す例が127例存在することから理解できる。

これは、特徴2についても同様である。〔A-2〕のÀ構成の補語名詞の特徴が、複数・不特定・‘-nom marqué’であることが確認できても、À構成全体がこの特徴と対応する訳ではないことは、

[A-1](48例)から看取できる。また、この特徴と DE 構成との対応も、例外として切り捨てられない例数に依って裏付けられる ([D-2])。

以上のことから、出現構成と補語名詞の特徴の対応は、固定的で一方の変化が他方の変化と連動するもの(α)と、固定的でなく、構成の交替が名詞特徴の変化を伴わないもの(β)の二つに区別できることになる。



そこで、(β)に於ける構成交替の特徴を問う為に、出現構成と限定補語の特徴との固定的関係を解き、三構成を次の様に把え直すこととする。

- 並置構成 = (SN₁) + { φ } + (SN₂) (SN₁) = 被限定名詞,
- À 構成 = (SN₁) + { à } + (SN₂) (SN₂) = 限定補語名詞,
- DE 構成 = (SN₁) + { de } + (SN₂) { φ, à, de } = 限定辞化記号

そして、各構成の出現は、(SN₂)を限定辞化し、名詞句内で限定補語として機能することを保証する記号の交替に依って決まると考えることとする。従って、上表[A-1]、[D-1]、[D-2]に於ける各表現は、次の様な記号交替に依って生じた構成の例ということになる。

$$\begin{array}{ll}
 \text{[A-1] filz al conte Aimeri (Louis, 2530)} & = (\text{SN}_1) + \left\{ \begin{array}{c} \phi \\ \} \\ \grave{a} \end{array} \right\} + (\text{SN}_2) \ 1 \\
 \text{cf. fill le conte Aimeri (idem, 2516)} & = (\text{SN}_1) + \{ \phi \} + (\text{SN}_2) \ 1 \\
 \text{[D-1] la mort de Rollant} & = (\text{SN}_1) + \left\{ \begin{array}{c} \phi \\ \} \\ \text{de} \end{array} \right\} + (\text{SN}_2) \ 1 \\
 \text{cf. la mort Rollant (Roland, 3012)} & = (\text{SN}_1) + \{ \phi \} + (\text{SN}_2) \ 1 \\
 \text{[D-2] l'abateïz des chevaliers} & = (\text{SN}_1) + \left\{ \begin{array}{c} \grave{a} \\ \} \\ \text{de} \end{array} \right\} + (\text{SN}_2) \ 2 \\
 \text{cf. filz a riches baruns (Gui, 654)} & = (\text{SN}_1) + \{ \grave{a} \} + (\text{SN}_2) \ 2
 \end{array}$$

(※ $\left\{ \begin{array}{c} \phi \\ \} \\ \grave{a} \end{array} \right\}$, $\left\{ \begin{array}{c} \phi \\ \} \\ \text{de} \end{array} \right\}$, $\left\{ \begin{array}{c} \grave{a} \\ \} \\ \text{de} \end{array} \right\}$ は、いずれも可逆変化と考える。

(SN₂) 1. 2 は、(SN₂)の特徴を表わしている。)

Ⅲ. À・DE 構成の特徴⁽¹³⁾

(SN₂)の特徴に着目した従来の構成出現の条件記述からは、上記三タイプのÀ・DE構成の出現が説明されないことは既に見た通りである。しかし、これらの出現が全く規則性を持たぬかと言えば、必ずしもそうではない。そこには、従来着目されていなかった、或いは、されてはいても充分にその意味が把握されていなかった別の文法化現象が存在しており、それが明らかにされれば説明できる様に思われる。そこで、以下ではこの三タイプの構成出現に潜む特徴を考察して行くこととする。

まず、[A-1]に於ける{φ}～{à}交替の特徴と、[A-2]に現われた{à}の選択との照合を通じÀ構成の性格について考えてみたい。

Ⅲ-1 [A-1]に現われたÀ構成に依る表現例は次の様である。

- (1) Al son seignor il lur seit boens plaidiz. (Alexis, 600)
 (その方が、彼らの為に、その方の主の良き弁護人となれますよう。)
- (2) En (la) cort al rei mult i avez ested, (Roland, 351)
 (あなたは、その王の宮廷にとても(長いこと)(仕えて)おられた。)
- (3) Qui ert compaignun a dan Gui, (Gui. 2207)
 (ギイ殿の仲間であった(ところの))

ここに見られる{φ}～{à}交替は、韻文に於ける音綴操作、文体効果を意図して、という言語体系外の原因に依っても生じうる。従って、個々の出現箇処についてその理由を問うのは難しい。しかし、仮りにその様な意図が介在したとしても、{φ}と交替する記号が{à}であって{de}ではないという環境の特質が想定できるのである。それが、ここで問題とする{φ}～{à}交替に依るÀ構成の孕む特徴として指摘できるものである。

[A-1]に於ける(SN₁)

- A. 親族名詞：fils, fille, frère, etc. (×36例)
 B. 従位者名詞：home, chevalier, senescal, etc. (×7)
 C. 所有物名詞：curt, Terre, ostel (×5)

その特徴は、(SN₁) (例文波線部)に位置する名詞に在る。[A-1]に分類された48例について、(SN₁)の名詞をまとめて見る。これらは左の様にA, B, C群に分けられる。(SN₁)にそれ

ぞれの名詞群が現われることから、この構成の(SN₁)と(SN₂)との間には、特定の意味関係が成立することが理解できる。「親族関係(RA)」、「主従関係(RB)」、そして言葉の最も厳密な意味での「所有関係(RC)」である。このことから何が考えられるだろうか。断定は未だ早計であるが、次の様に考えられるだろう。{φ}～{à}交替は一定の意味関係が成立する時に生ずる。この関係が成立しなければ生じないということである。それが上記三関係であることは言うまでもない。

興味深いことに、(SN₂)が特徴2を有することからÀ構成を成すと考えられた[A-2]に現われる例についても、(SN₁)に位置する名詞に同じ特徴が見られる。

- (4) Fille ad un cunpta de Rome la ciptét; (Alexis, 42)

(ローマの市のある伯爵の娘を)

- (5) car ge sui hom a un tuen ennemi mortel (Artu, 178)

(というのは、私は、あなた(にとって)の極悪なる敵の家来なのですから)

- (6) les deus escuz as deus chevaliers (idem, 12)

(二人の騎士の二枚の盾)

ちなみに、[A-2](38例)についてその(SN₁)の名詞は、A群に17例、B群に1例、C群に18例、分類できた⁽¹⁴⁾。

以上のことから理解できる様に、{φ}~{à}交替に依るÀ構成であれ、(SN₂)の特徴に対応するÀ構成であれ、(SN₁)と(SN₂)との間には、先述の三関係が成立すること。換言すれば、これらの関係はÀ構成に依って初めて表現されるものであったということである。

Ⅲ-2 [D-1][D-2]の{φ}~{de}、{à}~{de}交替に依るDE構成についてはどうであろうか。この構成についてもやはり同じことが指摘できる。

- (1) Plainums anseble le doel de nostre ami: (Alexis, 154)

(我々と一緒に我々の愛しい人を悼みましょう)(我々の愛しい人の悲嘆)

- (2) Et quant il ot aconté le Trespasement de Galaad et la mort Perceval, (Artu, 2)

(彼が、ガラーの身罷りとペルスヴァルの死を語ると)

上記二例の(SN₁)に位置するのは、「動詞状名詞」と見做しうる名詞群である。[D-1]に分類された例で、明らかに{φ}~{de}交替の確認できる65例⁽¹⁵⁾の中、51例がこの「動詞状名詞」に属していた。

この(SN₁)の特徴は、(SN₂)が特徴2を持ち{à}~{de}交替を生じて[D-2]に組み込まれた例にも当て嵌る。

- (3), et si tost comme it sorent la mort de leur père, et del roi Artu et des autres preudomes, (Artu, 195)

(彼らは、彼らの父と、アーサー王と、その他の勇者達の死を知るや)

この例では、{φ}~{de}交替と同時に、{à}~{de}交替に依る例を同時に観察することが

できる。(SN₁)が‘la mort’であるが故に、‘leur père, le roi Artu’の前で{ de }が生起することは、先述の通りだが、特徴2を示す‘les autres pseudomes’が、{ à }ではなく{ de }に依って限定辞化されている点が注目される。次例についても同様である。

- (4) De la mort d'un mien parent,

(Gui, 2784)
- (私の親類の一人の死に)

従って、(SN₁)に「動詞状名詞」⁽¹⁶⁾が位置する時には、(SN₂)の特徴に拘わらず、{ de }に依る限定辞化が見出されることになる。このことからDE構成の性格の一端が明らかにできる。それは、節の名詞句化を担うというものである。

ところで、Iにおいて従来のDE構成に関する指摘が、この限定補語の意味価値を問題にするのを見た。フレは、並置構成の限定補語が主語的であるのに対し、この構成の補語は主語的ではないとしていた。Wagner(1974)は強くこの立場を支持する⁽¹⁷⁾。確かに(SN₂)が非主語的でない例を取り上げることができる。先の‘le doel de nostre ami’がそうであるし、‘La Traïsun me jurrez de Rollant (Roland, 605)’(ロランの裏切り=ロランを裏切ることを誓え)も同様である。しかし、すぐに反証例も提出することができる。(cf. 例(2)(3)(4))

- (5) Entre le dol del pedra e de la medre,

(Alexis, 466)
- (父と母の悲嘆のさ中に)(父と母が悲しむこと)

どの様な節であれ、DE構成に依って名詞句変形ができると考えてこそ、この構成の性格が評価できるのであって、他動詞文のしかも補語を話題にする時にしかその利用が認められないというのは、極端すぎる見方ではないだろうか。(SN₂)の価値は、節の変形に伴う二次的側面に在る。(SN₁)に「動詞状名詞」の現われた例を、さらに(SN₂)の価値について分類したのが次表である。これからも、必ずしも非主語的という特徴が優勢とは見做せない。

DE 構成の (SN ₂) の価値		
	主語的	非主語的
特徴 1	28	23
特徴 2	15	7

Ⅲ-3 これまでに述べてきた(SN₁)が動詞状名詞である場合以外にも、DE構成の利用が見られる。それは、I-ⅴで触れた、ニロップ、ブルシエが示唆した例であるが、実は、フレ自身もその存在に気付いていた。しかし、前置詞‘de’の用法制限が失効する過程で現われた逸脱例と見做している⁽¹⁸⁾。しかし、ここにも規則性が感じられる。その根拠は、やはり、(SN₁)と(SN₂)との間に成立する意味関係である。{ φ }, 或いは、{ à }と交替する{ de }について、(SN₁)が動詞状名詞

でない例は、35例あった。これらについて (SN₁) に位置する名詞に特徴を求めると、「身体部位名詞」、或いは、譲渡不可能な事物を指し示す名詞が得られる。

- (1) De Mahumet les vertuz e le cors: (Roland, 3233)
 (ムハマドの霊験とその身にかけて)
- (2) et quant cil de la cité sorent que c'estoit li cors de monseigneur Gauvain,
 (Artu, 175)
 (そして街の人々が、それがゴーヴァン殿の身体(死体)だと知ると)
- (3) Le num lur dist del pedre e de la medre, (Alexis, 379)
 (彼は、人々に、その父と母の名を告げた。)
- (4) tant qu'il conquist les cuers de touz les hauz hommes, (Artu, 134)
 (とうとう、あらゆる諸侯の心を捕えてしまった。)
- (5) Vit del sain[t] home le vis e cleire et bel; (Alexis, 347)
 (彼は、その聖なる人の美しく輝やく顔を見た。)

上例(1)~(3)までは、(SN₂) が特徴 1 である故に、{ ϕ } ~ { de } 交替に依る例である。一方、例(4)(5)は、(SN₂) が特徴 2 であり { à } ~ { de } 交替に依る例である。

ここに現われた { de } の行動は、既に検討した (SN₁) に動詞状名詞が位置する場合のそれと一致している。つまり、並置構成の交替構成を { de } に依って決定する (SN₁) は、(SN₂) の特徴 2 に対応する構成も同様に { de } に依って決定するということである。従って、'li cors monseigneur Gouvain (Artu, 175)' に対して 'li cors de monseigneur Gauvain' 'le num la virgine (Alexis, 89)' ((聖)処女の名) に対して 'Le num del pedre' という交替は、(SN₂) が特徴 2 となれば、自ずと { de } を選択するものと考えることができる。上記例(4)(5)の { de } は、正にこの選択に依る。ここに、動詞状名詞と並んで身体部位名詞に代表される譲渡不可能性を示す名詞が (SN₁) に位置する例の { de } の生起に規則性を指摘することができる。

以上に見て来た À 構成・DE 構成は、次の様に (SN₁) の名詞との関係を考慮してモデル化できる。

(SN₁)

$$\begin{array}{l}
 \left(\begin{array}{l} \text{A. 親族名詞} \\ \text{B. 従位者名詞} \\ \text{C. 所有物名詞} \end{array} \right) + \left\{ \begin{array}{c} \phi \\ \vdots \\ \text{à} \end{array} \right\} + (\text{SN}_2) \ 1 \\
 \left(\begin{array}{l} \text{D. 動詞状名詞} \\ \text{E. 身体部位名詞} \end{array} \right) + \left\{ \begin{array}{c} \phi \\ \vdots \\ \text{de} \end{array} \right\} + (\text{SN}_2) \ 1 \\
 \text{等} \quad \quad \quad \left\{ \text{de} \right\} + (\text{SN}_2) \ 2
 \end{array}$$

ま と め

これまでの検討を通じ、古仏語に於ける限定補語を利用した句構成の併存についてまとめると、次の様になる。

1. 三構成の用法の基本には、À 構成と DE 構成との間に相補的な機能分担が存在した。これは、両構成の被限定名詞が殆ど交錯しないことから伺うことができる。
2. この機能分担は、被限定名詞の特徴と関連し、さらに、限定補語との間に成立する関係内容の相違に対応したものである。
3. この関係内容の相違は、直接的には両名詞を連結する前置詞の機能の違いに基づく。
4. 並置構成は、他二構成と相補して独自の表現内容を持っていたのではなく、À・DE 構成の機能の異なる前置詞を単一の { ϕ } 記号で代置した結果出現する。それ故、双方の関係内容を等しく表現し得たと考えられる。
5. { ϕ } 記号の出現は、二次的に、限定補語の特徴と関わっていた。

注

- (1) (a)型に現われる格の独立用法も(b)型の前置詞 a も補語名詞が人物名詞である時に認められる。
従って、当論文で扱う三構成はいずれも、補語名詞に [+humain] が現われるものについてのみにとする。
- (2) W. von Wartburg (1962) p. 79
- (3) R. L. Wagner (1974) p. 47
- (4) L. Foulet (1977) p. 21 該当する名詞としての次のものを挙げている。“père, mère, fils, femme, amie”
- (5) 同上。p. 21 “Dieu, le roi, le comte”
- (6) 同上。p. 20 不定冠詞・不定形容詞に依る限定を言う。或いは無冠詞の場合もあるとしている。
- (7) 同上。p. 22 フレは、“les grands” に対して地位の低い人物を考えている。“le chevalier, l'écuyer, le valet, la tourbe des inférieurs”
- (8) 同上。p. 14- ‘génitif subjectif’ に対する ‘génitif objectif’ と考えられる。
- (9) 同上。p. 25 “tels sont les mots ‘home, fame, gent,’ etc”
- (10) 名詞概念の呈示の仕方を考えれば、並置構成及び À 構成の限定補語は、時空間に具体化された (déterminé) 名詞の ‘défini, indéfini’ が問題となる。一方、[3]-(ii)の特徴は、‘défini, indéfini’ の前提としての ‘déterminé’ に対する ‘indéterminé’ 或いは、‘virtuel’ な用法ということになる。
- (11) 注(10)参照。[1]-(ii)として挙げられていた固有名詞は、特定化の極と考えられるので、ここでは、[+特定化]に含める。

- (12) [J-2]の3例は、例外と考えられる。

‘Feste toz Sainz’ (Louis, 2015)(Artu, 127) (万霊祭)

‘S’il fust fiz un empereur’ (Gui, 668)

前者は、祭日の名称として固定化された表現であろう。

- (13) 紙面の都合で充分例を取り挙げられなかったが、以下で{ ϕ }と交替するÀ・DE構成の例は、同一の被限定名詞と限定補語に依る並置構成例が認められるものである。或いは少なくとも、類似した対応例が見られるものである。

- (14) A, B, C群のいずれにも属さない例が2例在る。従って、この合計数は36例となる。属さない2例は、次の表現である。

‘le chef al riche soldein’ (Gui, 4083, 4096) (その金持ちの兵士の頭)

- (15) [D-1]79例中、常にDE構成を成し並置構成例に現われない名詞を取る例を除いてある。‘vérité, nouvelle, plait, estoire’等である。これらの名詞にも接続する‘de’は、並置構成では表現できない関係を表現しているものと思われる。

‘veraies noveles de Lancelot (Artu, 44)’ (ランスロの本当の消息)

- (16) ここで言う動詞状名詞は、必ずしも動詞派生に依る名詞を意味しない。節を名詞句変形する時に元の述部、述部の一部の代替表現として得られるものを示している。動詞概念が背景に在れば、‘le colp de Rollant’の様な普通名詞も含む。

- (17) Wagner (1974) p. 48

- (18) Foulet (1977) p. 27

参 考 文 献

1. Anglade, J., ‘Grammaire élémentaire de l’ancien français,’ Armand Colin, 1965
2. Brouciez, E., ‘Eléments de linguistique romane,’ Klincksieck, 1967 5^{ed}.
3. Foulet, L., ‘Petite syntaxe de l’ancien français,’ CFMA, Champion, 1977 3^{ed}.
4. Galliot, M., ‘Etudes d’ancien français,’ Didier, 1967
5. Guiraud, P., ‘Ancien français,’ PUF, col. ‘Que sais-je?’ 1975 5^{ed}
6. Kukenheim, L., ‘Grammaire historique de la langue française,’ Leyde, Universitaire pers Leiden. 1968
7. Ménard, Ph., ‘1. Syntaxe de l’ancien français,’ (Manuel du français du moyen âge), Bordeaux, SOBOÏ, 1976 N^{elle} éd.
8. Moignet, G., ‘Grammaire de l’ancien français,’ Klincksieck 1976, 2^{ed}.
9. Nyrop, K. R., ‘Grammaire historique de la langue française,’ Tome V. VI, Gyldendalske Boghandel Nordisk Forlag, 1925

10. Palm, L., 'La construction 'li filz le roi 'et les constructions concurrentes avec à et de,'
Almqvist & Wiksell, 1977
11. Raynand de Lage, G., 'Introduction à l'ancien français,' SEDES, 1975, 5^eéd.
12. Wagner, R. L., 'L'ancien français,' Larousse, 1974
13. Wartburg, W. von, '言語学の問題と方法', 紀伊之国屋書店 島岡茂訳 . 1973